

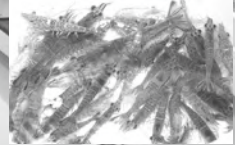
TACKLE スピニングとベイトの二刀流

★タックルの使い分けはテンヤを投げて広く探るときはスピニング、船下を狙うときはベイト。ベイトタックルの特徴は、スピニングに比べて糸フケが出にくいこと。糸フケを最小限にすることで着底が明確になり、根掛かりも軽減する

スピニングとベイト2タックルで楽しもう

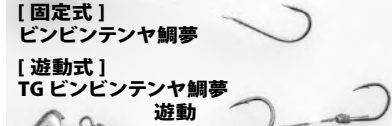


TackleData
★スピニングタックル
ロッド:青帝PRIZASTPS-210M-ST
リール:ステラC3000
★ベイトタックル
ロッド:青帝PRIZASTPC-230MH-ST
リール:スティールSS 150HG



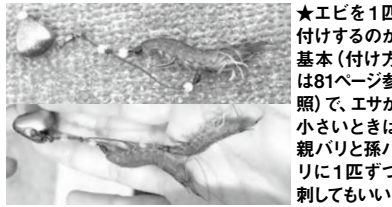
★エサは生きエビ(サルエビ)

TENYA



【固定式】ピンピンテンヤ鯛夢
【遊動式】TGピンピンテンヤ鯛夢 遊動

★テンヤは3~5号で遊動式でも固定式でもいい。ヨッシーはスピニングタックルで使うのが固定タイプの「ピンピンテンヤ鯛夢」、ベイトタックルでメインで使っているのは遊動タイプの「TGピンピンテンヤ鯛夢 遊動」



★エビを1匹付けるのが基本(付け方は81ページ参照)で、エサが小さいときは親バリと孫バリに1匹ずつ刺してもいい

その言いながらも、じっくりと竿先を見つめているヨッシー。細かいアタリがはまってくるにもかかわらず、あえて合わせていないようだ。リリースサイズが続く釣友たちを横目に、午前6時10分、ヨッシーがついにキープサイズをキャッチした。「小さい魚の小さいアタリは逃がすようにして、押さえ込むようなアタリだけ取るようにしたんだ」

明らかにナイスサイズを選んで釣ったヨッシー。小さい魚のアタリを逃がすために、ヨッシーはいくつかの工夫をしていた。まずは、合わせすぎないことだ。一つテンヤは、竿先にわずかな変化があれば、即、合わせる事が基本中の基本とされている。フルツ、ピシッ！この即合わせは、一つテンヤのだいご味にもなっている。エキスパートのヨッシーは、竿先やラインの変化にとても敏感だ。普通の釣り人ではなかなか気付かないようなわずかな違和感を見逃さず、鋭く合わせるのがヨッシー流である。しかし今回に限っては、小さなアタリを判別し、意図的に、そして華麗にスルーしている。

「チャリコやゲストだったことが分かるからね。これをいちいち全部合わせていたら、かえって手返しが悪くなる」確かに、釣友のイチロウなどはアタリがあるたびに鋭く大きな合わせを決め、リールを巻き、チャリコやゲストをリリースし、エサを付け替え、再投入し……を繰り返している。

小さなマダイが多いときこそあえて食われないように誘う。次なるヨッシーの工夫は、テンヤの動かし方だ。「具体的に説明すると、ペツペツと鋭く竿先をあおって、テンヤを横に素早く動かすんだ。小さい魚が追いつけないようなスピードを出している、というイメージだね。そして、別の場所に落とすようにする」



▲300~500グラム前後がよく釣れた

「これだけでも、小さいサイズにいくからだ。素早いアクションにもしつかり追従する」というメリットもある。チャリコやゲストを避ける工夫は、まだあった。孫バリを太軸に替えていたのだ。「これだけでも、小さいサイズ



この感じ
たまんねえ

吉岡進の釣りを楽しく感じるままに

E2F

Enjoy Every Fishing no.01

九十九里飯岡沖の 一つテンヤマダイ

★装いも新たにスタートしたヨッシーの Enjoy Every Fishing(略してE2F)。今回は九十九里飯岡港優光丸での生きエビ一つテンヤだ。すべての釣りを貪欲にエンジョイするヨッシーに負けず、マダイも貪欲に生きエビにアタックしてきた

文◎高橋剛 撮影◎本誌編集部



▲ヨッシーの釣り座は右舷ミヨシ。エンジン流して魚礁を探る

春の夜は、まだ長い。午前5時、九十九里飯岡港の空は真っ暗だが、海は多くの遊漁船の明かりでにぎわいを見せている。3月20日。ごくノーマルな月曜日にもかかわらず、飯岡の船宿はどこも盛況だ。21日が春分の日で祝日なので、連休にしている釣り客も多いようだ。「釣りを楽しもう」というポジティブな意気込みが、飯岡港には満ち満ちている。ヨッシーこと、ジャックル・プロスタップの吉岡進さんは、いつも以上に自信に満ちた表情をたたえながら、タックルを準備していた。「冬場は色いろと苦戦したけどさ……」とヨッシー。「今日は完全に勝ち戦。ってことが決まってるからね。余裕だよ」ゆったりとした構えのヨッシーである。

それもそのはず、今回チャレンジする飯岡・優光丸の一つテンヤマダイは、生きエビを使うのだ。「生きエビは強いよ。これだけでもう、7~8割は決まったよ。うなもんだね。エサ持ちはいいし、動くし、さらに目が光るんだから。このアピール力に敵うものはないよ」港を離れ、いいナギの海を進むこと約35分。船長から「ポイントが近くなってきました。準備してくださいね」とアナウンスが入る。水深は30メートル前後。ヨッシーは8号のテンヤを選んだ。「決して軽くないが……」

「おれは軽いテンヤにあまりこらえられない」生きエビが落ちてくる……。海の中はフェスティバル状態。いわゆるチャリコだ。この、元氣いっばいのチャリコたちをどうかわすかが、今回の大きな課題となった。「アタリの多さが生きエビ一つテンヤマダイの魅力。チャリコはもちらんだけど、とにかく色んな魚がアタックしてくる。続々と生きエビが落ちてくるんだから、きつと海の中はフェスティバル状態なんだよね」